

成瀬二帛直正藤原某

系嗣不詳

成瀬猪之助藤原松久

成瀬九条春律家

平城録卷第百十五

成瀬

藤藏藤原正義まこと藤原正頼まことの子なり

三河三河先祖又太帛基直寛永

いゝ二條蘭白良基の孫なり

良基放りて三河國加茂郡足助のに

寓居し二子を被く長子を公達二男

を基久といふ

按しこの良基三河國に流落せしといふ事不見
ふくまひ云達基久二人の名尊卑分脈不見なり



此は親のきこりけしきも寛永藩といふ
 変と大同小異して捨つるは姑く鑑む存に
 二人も

仰よりて附屬せられ文明十七年八月
廿二日岩津郷より死す法名を淨蓮と
し去孫を大藏國平といふ國平と
し其孫をといひて親氏君長親君と
歴仕し額田郡細海庄六名郷明大寺
の寺に願し六名郷の紫を授けし
住すと其子彌を信國重といふ藤石と
といふ是正義の祖父あり長親君と

是時より仕りまはり清康君逝去の後
廣忠卿國雅を避て仁勢國に移らせ
給ふとき男正頼ともは舊臣等と申還
城の事なまはり遂に岡崎のいれと

まはり天文九年安城と討死す家傳の
按らる

寛永承禰の家傳をいして先祖は法陽の御筋あり流落して三河國
より廣瀬郷に居住す其子又を市部廣瀬を家傳より奉親君與
起し流し事を分けて仕りしよりまはり君基業を興しぬまはり
酒井林太久保等の入りと流ししよりまはり又市部より已及累代市部家
はく七十八代の後正頼の父の時はいふて系圖號をせし其先を記し
事ありしを終る先祖の名をより正頼より系を記しと記せる寛政

重修譜編輯のとき呈せし家傳に同家傳人正典の家を始祖正成
已前の正統を述べて元祿年中生人正親より正統を寫さる
て家は傳つた家なりといふ是より見て参考とす
大い寛永譜より家傳と同くいふ今の家は傳へた父正親也

三河は生れ

寛永

もうり又ち市も藤大夫

といひて

家

清康君ははるまつり

寛永

天文四年十一月清康君森山にて居事

ありけり又忠卿いまだ初雅より海

せり松平門下信定潛る因法

城を押順せんといふ人樹寺に陣を

被く正親をより先は預死せんとい

せり半國家の存亡は軍より死を

決して討てしり欲いころこの小難を

悔り東西に分れて競ひ進むより多

く今世の忠豐同平八郎忠高先は進

て奮戦して正親も大原九郎右衛門惟宗

八國を六ヶ重等と同一く進んで

勇戦しりふに敵を遂に敗走しり

六年まゝ久保忠俊おと謀し何れせ
三木の松平藏人信孝をかくし居る
入しりたりるる手くふしをめくし
六月四月晦日頼林忠満八國珍重と
りし潜る年と城に馳参り馬駕を迎へ
八月朔日岡崎城に還入しありたり
及い久保忠俊頼林忠満八國珍重大原

家譜三州八
代記古傳集

惟家等各十貫文の地を加賜り久
一紙の御書を下され某年死すと
父の継し

家譜正義

東照宮に仕りしより寛永二の國二名郷

より家譜米地二百四十貫文を賜り也使

番々所より寛永旗奉行なりぬ家譜

鳥居四郎八の忠廣と同く進侍し

専軍事に預る寛永永祿元年十一月

同僚と平論し彼者を討果しこれに
伊勢氣を起し遠江國に潛居す
寛永藩國
朝大業廣記
同一年一向專修の徒皆きり討正義三河
國に歸り大名といひて妻をばい
岡崎に伺候せし二心を感
し先の伊勢氣を起し是より再
仕へしは是年十月より翌七年
の春といふまで數度の戦ひあり

軍功ありしは
寛永
藩 逆徒等の采地を分
りて勲功の賞をわたりしは正義
より三河國岡郷より四十貫文の地を
加へ賜ふ
寛永藩國朝
大業廣記 是年武田信玄大軍を
率ゐて三河國吉田の邊に出張しけし時
敵の先鋒の金の切羽のさしおし
武士諸卒を知らしむて見て正義四方
の人々を對し我今彼者を討取るべしと

速に敵陣に馳入るれを組て遂に其首を

とらひ類あき、其威を彰按てらるゝ武徳大成記
國朝大業廣元より弘平

玄蕃元清宗と同く敵陣より射て或は
首を射或は射て其を殪せし記す同八年武田の玄

三河國山家より其地に出張を是より

先正義の……殪をなせその

裝飾類い……著……巾着

い……假令討死をも……殪をい……

……聞人皆各番あり……嘲り……

此戦は略を隔て矢軍に……正義は殪を

著…………活さん事を厭ひ

む道より馳向ふ

東照宮所覽……安率二人を遣は

……制…………其二人を

袂抱……死……正義……

見もせし敵陣……み首……

……け日の一番首あり……

寛永
藩

て討ちつゝい君を討つてゐる忠臣も
もつてゐる覺えをういてや明日の戦ひは
勇々辛ひき名をくつて討死せんや
いふといひるもいふ正義はあつてけふ我も
やこつて是れをもいふにけふと和睦して
最期の別れを惜まんしとまうと友を
招きあひ又るまで酒宴にけふけふと
東照宮をうらうらとやういふ正義をい

儀國家の軍監として新井中城にさ
むけらるゝ忠臣に濱松親の軍監とま
あつたれども互に誓約せしことわれ
忠臣をいひ新井中城にまゐりいひ
るやうやう戦ひしうとまうといふ人
おれは武田親二万騎にまゐりて
其中に馳入て散るやうに彼をいひ
今こそ或いふれ恥はけらるゝと

みくく敗走常山紀談古
今武勇覚書忠廣も曾首

三級を太刀貫き正義は見せん

あうう尋ねる正義も首二級を

提中忠廣を尋ねるはあし携へ

首を見て相言名とうらういその

首を投擧てあひく敵陣は馳

り又首うて言名家齊常山紀談
古今武勇覚書此時

正義弟を斬つ正一を呼びはげ道

案内きくは信春して濱松の城

入るもろく我はいよとまる討死

とて又敵陣は馳ひ寛永譜武
徳大成記いふも

して山縣の席を昌景を討んと彼の

中は突いて武田のま正義一人を討る

はも既昌景うらうく見えぬも

武田信豊穴山梅雪馬場信廣等横河

より馳ける遂に正義はあつた討れり

忠廣のくゝあゝとしか又首よりて正義
を尋めども見えずは方より今
討死して首は歟とてけりしを
はめて正義は稀世の勇士ありて違ひ
討死せしは常きこと一涙よりあり
我今の世は後れこそくらやみはき
とて士卒はむひ汝等命を金く
ふもこの世を人々よ告あせむといひ

控て又敵陣に馳り目覺しき御
討死しきり
常山紅顔古
今武勇覚書此より正義二十八年
あり
寛永
講法名を大忠といふ
家
譜

東照宮演習は帰らせ給ひ奉りしを
聞めし其討死を憐れみまひ弟
名を世に正一と
按ては寛永齋正一の名をき
ふも一齋を名とて今家譜に誤り遺跡を
賜ふ正一とていふ生れ
寛永齋
家譜とていふと
いふ家永禄二年故より三河國をより

甲斐國のむき武田家の所諸角也後ち

其の同公とある寛永 甲陽軍鑑同四年信濃國川中

鴻の戦い豊後守の討死せし時款其

首をとりて去んとも正しきこと彼

部を討討て諸角の首ともしは獲る

帰る寛永 瑞信玄是を以て正しを拓き其

功を賞し家臣と家 瑞甲斐國を以て

地を與へり其後漸く甲斐國を以て

關東のむきりりちりちり北條家忠房

の里見と下総國鴻の巻とて合戦あり

正北條家の属一奮戦し首を得り

け以てこの國と人の他國は姓ことを禁

止せり正北條家書を通しち

郷は陽りちり北條家とていそと

めちりちり遂は依りちり二河國は歸る

寛永 瑞元龜元年姊川の役あり

東照宮は旅いふ事ありて名を

昭く寛永禱
戰能聞同二年信玄遠江國

出張して袋井陣しつ時内藤三

石山信成を伴候しつ出陣ひは

信成大軍を圍まれ困窮せんとい

われ又む多中勢大輔忠勝等壯士數人

を援えしつをりし時忠勝は

信玄の先づ見付の勢を以て初めひし

あつてしつ戦ひしつ一仰をうけし

其勢は馳ひし命を傳へるまゝとて

歸りしつもさう九里の間信玄の名

をい進みしつし一等苦戦し

遂に軍を收む按さうは國朝大業應記の忠勝人殺を
率ひて天竺川を越りしとき東照宮は

りやとてしつ使を命ぜりしつ馳ひして忠勝は對面し汝うけつ
武勇に君も八幡大明神の如きとてしつくさるる人力の及ぶる事
しつはしつと人をも呼りしつしつ方の諸軍忠勝の勇を羨み
感せしつはしつ寛永禱し載るる事と同一しつ

と十二月に万原の合戦は西方利を失ひ

退くとき信玄の么七騎

東照宮の御所を慕い来りしに
正進みて其一人を斬落し馬をも祇
けけけ其残る人を見り馬より立ち
しり彼落る者を援けんと其隙に
馬を馳し瀕死にせしに
正一日下教を授けし好小栗又一忠政
等と告りしに馬は従ひしに
寛永 藩
小栗家 舊記

常山 紀談

天正三年長篠の役は正一より武田

家諸士の旗をわけて記憶せしに

伊旗もわけて志願の姓名を言上

せしに違ふ事あるに於て伊旗を

奉り織田右府の陣にいり公戦を

しむしや否れむねをとも右府

正を呼て返答なりしより接戦及び

勇を奮いて名に寛永 藩は時日下部

りて守備の者れ怠慢をいまいむ
る一との語へ正しく語らるる
退れ寛永將家
志日記追加やと一人を副将とて
まゝにさういふ者人を擡ぐとの語られ
はりお教まほしき事なる(いふこと)
さるよりその意は任せざる寛永將家
柏青物語りて
巡見する事凡百廿日餘を経りて
一日も怠りて事あり寛永
將 同十年

武田勝頼亡いて後

東照宮用斐國よりいひせぬまゝ
市川よりまゝして用斐先方様と
拓き給へるを織田右府園に割
とありて正一先より武田家より属せ
時、市川の諸士は好む通へるは寛永
將
武徳大成記
家忠日記追加彼堂より流るる水と懐きみり
ゝりて病つる者害を避て山林や

隠しんきんにまほの人をさうく
ふ早く市川よりふつた尋めく
ふふふを彼川に書きさうして帰り
る寛永其夜市川より十騎の組に米倉
主計助忠継折井市兵衛次昌尋ね
ふふふけふ言ふく執事く
けふいやく忠継次昌あふけふ拜謁を
寛永 武徳大成
記 家忠日記 追加此時武川の諸士は魔下

属せんといふに連ふ人質を山とく
のふふより家あふ武川より帰る諸士
れ人質をさうさうく寛永各月俸
を賜ひ米倉是より遠に國柄山に包き
ふのいて居るくく仰ふ家譜 寛永
米倉是
年六月織田右府事より後甲斐國の
土氏等河尻北條等無降を教害くく
騒動ふ及びくふ正一及び日中教是好

因部諸君を以て正保等より業代を以て
者されいとして人須賀康高は保らむ
甲府の擾亂を以て正保等より命せむ
ふより各被地はいふ正保に綱等より
古府中よりまて甲斐の先方の士を以て
皆は魔り属せしむ家忠日記
正保加七月
東照宮新府よりせ給ひ北條氏直も
甲斐信濃を畧するに四万餘人を以て

率に佐徳國を以て甲斐國といふより若
しある陣より對陣するより數日
なり寛永禪武
徳大成元此以て一氏直を以て者
二人を生捕陣中より磔するに寛永禪國
朝大業廣記
かくして十一月甲斐信濃を以て國の令を以て
しに濱松を以て歸らせ給ふに甲斐親老は
甲府の郡代を命せしむ正保に日下部
冬好より甲斐國の奉り職より

まゝ市川以清齋工藤元隨齋岩間
 人藏安等。國中の老説を聞て
 進退を以て命せしむ。正一を好し。是
 等の事。讀國政を以て。家齊武德大成記
 家忠日記追加
 是より先遠に國秋葉寺にて。魔下を
 属せし。甲斐信濃兩國の諸士に誓ひて
 敵を以て正一を好し。同くは事に
 讀る。武德大成記
 家忠日記追加
 同十二年根元法師等

百人を以て。今も根元同公等
 家齊寛永根元齊○按じうは寛永齊の此事を十三年に
 修しけり。今も此を参考して改し。一より
 是年法井雁を以て。道多を以て。使して
 仰下さる。台に。より。正一。普く國中
 を尋ねて。信を。諸人。責。彼。他。法
 を。記せし。事。及び。今國の仕。並。法。度。を
 式目。其。外。軍。伍。を。記せし。事。信。を。待
 稿。等。を。得。て。より。濱。松。に。い。り。て。是。を

敏也家同十八年小田原陣の時甲府

より守城せし按ては國朝大業廣記に小田原の役は信奉
せしゆり其地頭の人を記せし中より一員

正田斐國は恒より事既

九年より國中いよ寛永靜燈せし

先田斐國を徙し治ししを創る

とてまづ正田を武元國群形城とせ

りし武川根元の者を附屬しとす

かくて北武藏の制法を定るるを奉

り且甲料の地七石の代官職あり

武藏國榛澤男いかに食込に國垣田二郡

うちより赤地二千石を賜ふ寛永諸國朝
大業廣記

慶長九年上杉景勝征伐より陸奥國

よりせ給ふより仰せうけて

台徳院殿に依ひしより甲府に

よりより下野國宇都宮といふ地に

石田三成謀叛より、その元々こそ、是より
伊馬をわづらひて、あまゝし中山道を経て
進發し、かくして、志田昌幸の等、なる
上田城を攻陥し、肘仰をうけて、諸士の
陣布をわづらひ、きむし時、長子正成は
東照宮の御魔りよまを、先づ、おけ
られ、根元の者百人を、正成の附屬と
逆託、伏誅の後、日下部を、好米津清盛の

清勝等と仰をうけて、板倉勝重の副、
伏見の留守居を、はな、えの、おも、く
根元元を、預け、る、後、清勝は、和泉國
堺の改新とあり、勝重は、京都を、征せ、
く、正一を、好伏見城の留守居と、は、な、む
其、後、松平隠岐守、定勝、城代、となり
り、り、松平尋常の、乙、勢、は、正一を、好、連判
めて、是を、執、り、ひ、た、事、は、か、い、る、もの、は

定勝判形を加へたり又仰をうけこ
ぬに國法くわくはふ井教いけう七しち石いしの忠代官ちゅうだいぐわんをばよ
板倉勝重いたくらかつしげとありし所ところに事を
裁断さいだんすす寛永くわんえい正一しやういつ伏見ふし見をまゝ時國ときくに正
成せい駿府すまふよりしる魚味の料りやうを
きりし黄金くわんごんを納のうめし正一しやういつ受て紙しを
包つつみ常じやうの店みせに藏くらへたり訪たづねるもの
ありし是こゝを指さしし男おとこ正成せいせい許もとり

福保ふくたけのしるしを納のうめし金かねを我われ兵衛べゐと
食くせんとありし是こゝを見みる事
ありし所ところを同どうし十九年
大坂おさかの役やくより正一の孫そんも依よひしとあり
し所ところに陣じんの後のち正一の許もとよりありし
對面たいめんよりしるしに戦場せんばより出でる必かならず良
馬うまを蓄たくわふし是こゝを買か得える事
金十枚きんじふまいより孫二人そんにふたりを興きようふし

正しく未だを案し漫なる費たるを

さる人々感しけり前橋舊蔵 元和元年

任勢國龜山城をもちて仰けり

しる既より年光て餘年あるを希く

守城の事を申さるる一若恩賞し

んま黄金を賜りてらんさるに餘年を

あへさむるは多かりき

東照宮其直言を感し給ひ黄金を

賜ふ按まうは太極記は廣瀬藤藏大坂再亂より首一級を賜りてらんも
藤元といひ者正義の外より一正の事を賜りて詳

以て同二年別發して一齋と稱し是

より先

東照宮其直言を賜ひしは先祖某

は賜ひし宗述の刀と共な秘物と

家傳人家傳同六年六月廿八日午二時

して死す寛永法名を道譽といふ家傳其

子四人なり長男隼人正正成を尾張

人約言義直卿は附屬せしめて彼館を

仕入寛永二男に藏助を正寛永の瑞助

といひ家勝者とも寛永掃部といひ

幼雅のともより家

東照宮は仕へしより小姓を

けしもの文祿二年伏見まで同僚と年

論一遂は其人を討て逐電一のら

筑前中津言表秋は仕へ其のち松平

肥前守利常の家臣とあり寛永二男豊後

守正氏も早くより仕へしよりて別家と

興も家四男のちある正勝といひ家傳

よりあるといひ寛永慶長十九年

八月父正一八旬を及ひし時其は

俱して駿府にまゐりしより

東照宮にまゐりしよりけるけし

正一正勝を指さして希くはけり遺之跡

なにいれは揚ふる色——と言ふことゆは密
にりて正勝は宋地のゆき印とすん
親筆とて成瀬右衛門と記して賜ふ
寛永永曆同
朝大業廣記

九月

大猷院殿より上洛の儀奉り列し同十一年
七月より洛にいせ洛へとれたるいひ

あきま川る

永曆○今の太坂町奉行
成瀬岡崎寺正定より祖あり